2021 年 9 月 5 日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書 1 章 9～11 節
説教題：再創造の始まり

ある時、1 人の牧師と議論をしたことがあります。その先生は「洗礼は浸礼―(全身を水に浸す形の洗礼)―でなければならない」と主張しておられる方で、私は「なぜですか」と尋ねたのです。そうすると先生は「イエス様が全身を水に浸されたからです」と言われるのです。私は滴礼―(頭から水をかける形の洗礼)―で洗礼をうけましたから、少しムキになって、「聖書には、イエス様が全身を水に浸けられたとは書いていないですよね」と言いました。その先生は「いや、書いてあるよ」と言われ、そこで引用されたのが、今日のこの個所だったように覚えています。私は「水の中から上がられると」(10)と書いてあるから、「イエス様が水の中に腰まで浸られて、ヨハネが頭から水をかけたかも知れませんよね」と言うようなことを言って、議論したのを覚えています。あれから 15 年になります。今日の箇所をメッセージするために改めて色々な本を読みましたが、どうも、イエス様が全身を水に浸された、という意見が多いようです。しかし、浸礼でも、滴礼でも、洗礼の尊さに違いはありません。大事なのは、イエス様が洗礼を受けて下さった、ということです。

今日の箇所は、イエス様が洗礼を受けられた記事を記します。しかし、マルコは既に 1 章 1 節で「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」(1:1)と書いて、イエス様を「神の子」だと断言しました。「神の子」であるイエス様には、罪はありません。従ってヨハネが呼びかけていた「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ(洗礼)」(1:4)は必要なかったのです。それなのに、なぜイエス様は洗礼を受けられたのでしょうか。イエス様の洗礼は、何を意味するのでしょうか。今朝はそのようなテーマで学びます。

1：内容～罪人となられた主イエス

「イエス様の洗礼は何を意味するのか」、それを考える鍵になるのが 10～11 節の御言葉です。イエス様が洗礼を受けて水から上がられた時、2 つのことが起こりました。1 つは「天が裂けて御霊が鳩のように」(1:10)イエスの上に下って来ました。2 つ目は「天から…『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ』」(1:11)という声がしました。この 2 つのことは何を教えるのでしょうか。「旧約聖書」が、2 つの意味を教えてくれます。

1 番目の「『天が裂けて御霊が鳩のように』イエス様の上に下って来たこと」についてですが、このことと関係のある御言葉が 2 つあります。1 つは「イザヤ書 64 章 1 節」です。「どうか、天を裂いて降ってください。御前に山々が揺れ動くように」(イザヤ 64:1 新共同訳)。イザヤがこの祈りの言葉を語っている時、念頭にあったのは、やがてイスラエルの人々が捕囚の地に引いていかれ、自分達の前途には黒い雲しか見えない時代でした。天が見えない。それはつまり「神が見えない、神の御業が見えない」ということです。その中で人々は叫んだのです。「神様、どうぞ天の雲を裂いて、雲を追い払って、山々が揺れ動くような御業を行って下さい」。それ以来、やがて捕囚の地から故郷に帰った後も、人々はその祈りをして来たのです。その祈りの言葉に答えるようにして、今、天が開かれたのです。

そして「御霊が鳩のように―(イエス様の)―上に下られ(た)」(10)ですが、「天地創造」の様子を、聖書は「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた」(創世記 1:2)と記します。この「動いていた」という言葉は「鳥が空を舞うように動いていた」というニュアンスの言葉だそうです。神の霊は、鳥のように激しく動いて地に神の御業を生み出して行き

ました。イエス様が洗礼を受けられた時、神の霊が、今また鳥のように激しく動き始めてイエス様に下って来たのです。つまりそれは、「創世記」がもう一度、イエス様を通して新しく繰り返されることを示すのです。天が裂け、神がイエスを通して御業を為さる。父なる神、子なる神(イエス)、聖霊なる神、三位一体の神による新しい「創世記」が今始まる、そのことが示されているのです。

しかし「新しい創世記、新しい創造」と言っても、具体的には何が始まるのでしょうか。それを教えるのが 2 つ目の「天から…『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ』(という声がした)」(1:11)ということす。このことに関わりのある「旧約」の御言葉も 2 つだけ取り上げます。1 つは「創世記 22 章」の「アブラハムのイサク奉献」の記事です。神はアブラハムに向かって言われます。「『あなたの…愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい』…アブラハムは…刀を取って自分の子をほふろうとした。そのとき…御使いは仰せられた。『あなたの手を、その子に下してはならない…あなたは…自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた』…『…あなたが…あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し…』」(創世記 22:1～17)。ここで「あなたの愛しているひとり子」、「自分のひとり子」、「あなたのひとり子」と 3 回言われています。「マルコ 1 章 11 節」の「愛する子」という言葉は、「ひとり子」と言う意味でもあります。アブラハムは、神の命令で「愛するひとり子」を捧げようとしました。神も「愛するひとり子」イエスを捧げようとしておられるのです。その神の決意がこの言葉に込められているのです。その決意がイエス様に伝えられ、イエス様は「自分を十字架に捧げる」という使命を既にここで確認されたのです。

2 つ目は「イザヤ書 42 章 1 節」です。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす」(イザヤ 42:1)。神に選ばれた神のしもべ。ヘブル語では、この「わたしのしもべ」の「しもべ」には、「子」という意味があるそうです。「わたしの子」となります。そしてこの 42 章の言葉は、やがて 53 章に至ってイエス様の生涯そのものを描いて「神のしもべ(子)が苦しみの中で『罪人の一人』に数えられて死んでしまう、しかし死ぬことによって神の御心を成し遂げる、自らもそれを喜んで引き受ける」、そのような姿が描かれて行くのです。

以上、イエス様が洗礼を受けられた時に起こった 2 つのことを、「旧約」の御言葉から見ました。これらを通して、聖書は何を教えるのでしょうか。

イエス様の洗礼によって天が開けたのです。天が見えた。神の御業が人々のところに届くようになったのです。そしてイエス様を通して、イエス様に注がれた聖霊を通して、新しい御業が始まったのです。それは具体的に言うと…。この「天が裂けて」(10)の「裂ける」という言葉は、「マルコ福音書」の中でもう 1 箇所使われています。「それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」(マルコ 15:37～38)。イエス様の十字架が成った時、神殿の幕が裂けたのです。厚さが 10cm もある幕です。その幕は、聖所と至聖所の間を仕切っていました。つまり、人と神を仕切っていたのです。その幕が裂けたといことは、イエス様のご生涯と十字架によって、誰でもが神に近づけるようになったということです。イエス様という神殿を通して、私達も神と交わることが出来るようになったのです。神が「愛するひとり子」を十字架に捧げることによって、誰でも神に近づけるようになった、そのことを端的に示すのが、十字架の時のローマ百人隊長の言葉です。「イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『この方はまことに神の子であった』と言った」(マルコ 15:39)。十字架を

通して、イエス様を「神の子」と初めて認めることが出来たのは、イエス様を十字架に架けた側の異邦人でした。教会の伝承は、彼が後にキリスト者になったと伝えます。こういう人達が増えて行って、そして聖霊が豊かに働かれて、教会はやがてローマ帝国をひっくり返して行くのです。歴史が変わるのです。

いずれにしても、イエス様の洗礼は、十字架で成し遂げられる神と人との新しい関係によって、つまり人がイエス様によって神と真に結びつき、その人に聖霊が与えられ、その人の心に神の国が生まれ、そのような信仰者が増えることによって地上に神の国が広がり、それによって新しい歴史が造られて行く、そのような流れに繋がって行くのです。そしてそれは、やがてイエス様が見える形で王として世を支配為さる千年王国、さらには新天新地へと繋がって行くのです。主の洗礼は、そのように「新しい創世記、新しい創造」の始まりを指し示す大きな出来事だったのです。

2：適用～主イエスに罪人になってもらった私達

この個所が私達に投げかけているチャレンジは何でしょうか。「イザヤ 53 章 12 節」に「彼が…そむいた人たち―(罪人)―とともに数えられた…」(イザヤ 53:12)という御言葉があります。これは十字架のことを語っている御言葉ですが、同時にこの「洗礼」の出来事を指している言葉だとも言われます。イエス様は、ヨハネの許に集まっている多くの人々と何ら変わらない様子でここに立って、順番を待っておられたと思います。罪の赦しを求めて、悔い改めの洗礼を受ける大勢の人々の中に立ち、その 1 人として洗礼を受けられたのです。それは、ご自分が罪人の 1 人に成り切るためだったのです。つまり私達は、イエス様に罪人になってもらって、罪の罰を肩代わりしてもらわなければならない者なのです。イエス様は、私達と同じところに立ち、私達の身代わりになるために洗礼を受けて下さったのです。

ある方が初めて教会に来られた時、牧師に「あなたも罪人ですよ」と言われて、「なぜ私が罪人か」と怒って、2 度と教会に行かなかった、という話を聞きました。もしかしたら、その先生の言い方も拙かったのかも知れません。しかし、神の子が洗礼を受けられた。やがて十字架の上で私達の罪の罰を受けることを覚悟して、罪人の 1 人になり切って下さった。それは即ち、神の目に私達は、神の子に身代わりになって頂かなければならないほどの罪人だと言うことです。「犯罪を犯した」ということではありません。そうすると「なぜ私が罪人か」ということになります。そうではない。しかし私達は、神の願っているように愛に生きることが出来ないのです。自分の我を通して、自分を義として生きてしまう、良いと分かっていることをすることが出来ない、人を赦すことも難しい、プライドが邪魔する、あるいは、私達を愛して止まない神様を信頼し切ることが出来ない、何かあると呟いてばかりいる、そのような者ではないでしょうか。そして、口では「罪人だ」言ったとしても、もしかしたら自分の罪の姿を、イエス様ほど真剣には受け止めていないのではないでしょうか。だから信仰が揺れるのではないでしょうか。「この信仰を手放してはダメだ、イエス様から離れてはダメだ」という思いが薄れるのではないでしょうか。イエス様への感謝、十字架への感謝が薄れるのではないでしょうか。

私達が「主の御名によって」洗礼を受けるということは、イエス様が、私のために、私の罪を肩代わりして下さるために、私の身代わりになるために、洗礼を受けて下さった、そしてこんな私が、神様に「神の子」として迎えられ、天国に入れるようにして下さった、そのことを認め、悔い改め、感謝することです。そのように神様の前に遜ることです。{神は言われます。「わたしは…心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためで

ある」(イザヤ 57:15)。遜ることは、祝福に繋がるのです}。そして生涯を、イエス様に委ねて行く決心をすることです。

何度かお話ししていますが、私が「キリスト教は凄い」と初めて思ったのは、或る方の洗礼を通してでした。私がその方と出会った頃、その方は、ご家族を亡くされ、辛いところを通って来られ、大きな痛みを経験され、私のような者に、涙を浮かべながらご自分の辛い経験を話して下さっていました。神様については「神がいるなら、なぜ、私にこんなことがあるのだ」という神に対する反発のような思いも語って下さいました。それでもその方は教会生活を続けられました。そして—(詳しくご紹介する時間はありませんが)—それから 2 年後、神様が迫って下さったのです、その方は、神様によって痛みを癒され、何より神様の下さる天国の希望をご自分のこととしてしっかり受け取られ、その神の恵みの前に遜り、全てを委ねたご様子で、満面の笑みを浮かべて洗礼を受けられました。私はそれまで、あのような素晴らしい笑顔で洗礼を受ける方を見たことがありませんでした。私はその方のご様子を拝見して「キリスト教は凄い、こんなに人を変えるのか…」と思いました。そのこともあって、その頃、少しずつ感じていた神様の召しを真剣に受け止めるようになりました。福音の力は凄いと思いますし、洗礼は、このイエス様と 1 つになることの出来る素晴らしい儀式(礼典)だと思います。聖書は言います。「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」(ガラテヤ 3:27)。本当にイエス様と 1 つになれるのです。

既に洗礼を受けられた方々がおられます。これから洗礼を受けられる方々がおられます。これから洗礼を受けられる方々が、少しでも早く、天の名簿にお名前を刻むことがお出来になりますように、心よりお祈りすることです。しかし、どういう方であっても、私達はもう一度、「イエス様が私のために洗礼を受けて下さった」、そのことを真剣に受け止めたいのです。その時、私達は砕かれ、イエス様としっかり結びつくことが出来るのです。神の救いの御業を心から感謝して、全てを委ねることが出来るのです。イエス様は、私達のために、洗礼を受けて下さいました。そのことを思い、私達は、悔い改めと感謝を捧げて行きたいと願います。